

入選 高学年の部

お母さんとドア

東京都
北区立梅木小学校六年

池田 潮音

「ねえ、ママ。あのドアってなんのためにあるの？」

妹がソファから身をのりだし、キッチンのほうへと体をむけた。子供部屋と私と妹の寝室はとなりであり、その間になぜかドアがあるのだ。

「なんでだと思う？」

母がキッチンからソファへへと歩きながら言った。

「えー……。移動しやすいように？私は母のほうを向いて聞いけるように答えた。

「うん……。そうでもあるけど、ちがうんだな……。」

母はにこにこしながら言う。「えー……。私と妹は分からなかった。何か理由があるのだろうか？」

「え、はじめから設計図をかく人が決めたんじゃないの？」

私はあのドアをじーっと見つめながら聞いた。「ううん。ママが大工さんにたのんだんだよ」母は首を横にふりながら言った。

「ええり、じゃあ、なんで？早く教えてよ！」妹が目を輝かせる。母はふふと笑い、話し始めた。

「二人もいつか一人ずつ部屋を持つでしょ？そのとき、二人は子供部屋と自分たちの寝室を使うの。一人部屋を持つころには、二人とももう、おとしごろでしょ？親に言えないことが出てくると思うよ。そのとき、姉妹で相談してほし

いんだ。もし朱梨（私の妹です）がお姉ちゃんの部屋に行くときに、リビングに行くドアを開けて、親が見ている中、お姉ちゃんの部屋に行くって気まずいでしょ。そんなときに、あのドアを使つてほしいの。あのドアなら、リビングに出なくても、すぐに相手の部屋に行けるじゃない？」

「へー……」

私と妹は声をそろえて言った。そしてすっかり母に感心してしまった。

「ママって頭いいね！」

私はうんうんとうなずきながらつぶやいた。「ハハハ、べつに頭がいいわけじゃないよ！」母は笑いながら言う。

もし、私が高校生になったら、友達のことや恋の相談、なやみことなどを妹に話すだろう。そんなときに、あのドアが役にたつだろう。

妹の部屋に行くときに、あのドアにふれたら母の言っていたことを思い出すと思う。このドアがあつてよかった、お母さんはやはり私たちのことを考えてくれているんだとうれしい気持ちになる。

私と妹のことを考えてくれた、母の思いがまつたあのドアを、私はこれからも大切にしていきたい。お母さん、これからもよろしくね！